

慈濟 239 ものがたり

TZU CHI ● ツーチャー



2016 ● 11

慈濟ものがたり

N
O
2
3
9

慈濟基金會

今月の表紙

花蓮慈濟病院的医療チームは日々、台湾東部の花蓮県と台東県の人々の健康を守っている。三十年來の諸々の医療成果は国内外の患者に希望をもたらし、遠方からも治療にやってくる。

(撮影・顏霖沼)



表見返し●

文・證嚴法師／訳・済運／撮影・李白士

人の恩人になろう

内に誠正信實を修め

人や物事に対して

正の心と誠意で対応すること

信心を啓発して立願し

地に足を着けた人生を送りましょう

外に対しては慈悲喜捨を実践し

広く良縁を結び

互いに愛で助け合うこと

他人の苦を取り除いて喜びを与え

精一杯、幸福をもたらしましょう



目次

【社論】

悔いのない真情を永久に

慈願／訳 4

【主題報道・慈済花蓮病院30周年】

初心を忘れない

済運／訳 8

【家の修繕】

□被災者の屋根を修繕する

慈願／訳 24

□古民家 現代のレトロスタイル

黒川 章子／訳 36

【健康ボックス】

すばらしい熟年

葉美娥／訳 40

【天涯の慈済・シンバブエの物語】

星空の下の屋根のない家は

慈願／訳 48

楽しい我が家になった

【人文教育】

ブラダーウィリー症候群の子供たち

静思堂キャンプ

高嶋由紀子／訳 58

【證嚴法師のお諭し】

災害が少なくなる良い方法

慈願／訳 71

【大地の守護者】

ダムの下流のおばあさん

黒川由希／訳 82

【法を聞く心得】

万事に理が通ると円満になる

慈願／訳 94

法は清らかな水の如く塵埃を浄める

慈願／訳 101

慈済大事記【九、十月】

済運／訳 105

人の恩人になろう

済運／訳 表見返し

問答 慮愍／訳 35

静思語

慮愍／訳 104

漫画《清らかな智慧》

済運／訳 裏見返し

悔いのない真情を永久に

◎ 訳・慈願

花蓮^{ツチ}慈済病院は開業から三十年を迎えた。発展の遅れた僻地と言われていた東台湾に誕生した後、台湾全島に六カ所の医療施設を開設するまでに発展した。さらに医療ボランティアチーム「人医会」を結成し、国内外で施療活動を行っている。現地の医療関係者も人医会の活動に参画しており、台湾の医療と社会の歴史上に、数々の愛の奇跡を成し遂げてきた。

一九八六年の夏、花蓮慈済病院は七年の建設期間を経て、ついに開業した。證嚴法師は、病院が立つ土地のすべて、建物や歩道に使われているレンガの一つ一つに、人々の心血が注がれていると、悲喜こもごもに言われた。仏教の師が発心した憐れみの心と願いは、無数の愛ある人々の共鳴と支援を得て、不可能を可能と化した。「菩薩はこの世にいる」ことを多くの人々が証明し、さらに後に続く多くの善なる

人々を鼓舞していた。

慈済病院が建設される前の十三年間、證嚴法師は全力で慈善奉仕を行っていた。自ら弱者を訪問しケアに当たる過程で、「貧しいために病気になる、病気であるために貧しくなる」という悪循環が貧困と病の原因であることを知った。そして、数人の医療関係者と慈済ボランティアの支持を得て、花蓮市仁愛街に「貧民施療所」を設立し、貧困者に対して定期的に診察や治療を行った。

当時の台湾は高度成長期で、国民の所得は急速に上昇していたが、医療など社会福祉の整備は遅れていた。政府は大型財団法人病院や私立大学の医学部など、民間資本の医療施設の創設を奨励していたが、それらもほとんど都市部に集中していた。辺境の地では小さな診療所以外に医療施設はなく、医療機器の設備がなかったため大きな手術は行うことができず、そうした治療が必要な患者は遠く台北まで行かなければならなかった。

法師は医療資源が民衆に均等に振り分けられていない現状に心を痛め、自ら病院

を建設することを決心された。当時の台湾では、高額な保証金を納めなければ治療を受けられない仕組みだったが、保証金を納めずとも治療を受けられる病院を建設しようと決意した。貧しい患者が治療を受けられるように、また、病気のせいで一家の生活が困窮しないよう願った。

この夢のような病院建設の構想は、資金調達や土地の獲得などをめぐって様々な難関にぶち当たった。そして、それらの問題をどうにかクリアしても、今度はどのようにして僻地のイメージが強い花蓮に優秀な医療人材を招聘するか、という問題に出くわした。花蓮メノナイト病院創立院長のローランド P・ブロン氏は当時、「今の台湾の若い医師たちは、米国は近いが花蓮は遥かに遠いところだと思っている」とおっしゃっていた。しかし幸い、花蓮慈濟病院と台湾大学病院の提携教育によって、医療スタッフ招集の問題は解決できた。

花蓮慈濟病院設立当初から在職している人たちは、長い歳月を経て今では銀髪になっているが、法師の意思に感動し、馳せ参じた初心は未だ変わりが無い。長年に

わたって黙々と職場を守ってきた医師や医学生の一ストーリーは数えきれないほどたくさんある。その中には、慈濟病院の医師が示した手本がどのようにして受け継がれているのか、また、現代社会で頻繁に起きている医療従事者の過労の問題や医療訴訟の試練の中で、どのようにして「人医」たる使命を担ってきたのか、詳細に記している。

花蓮慈濟病院が設立された後、看護師専門学校と医学部が誕生し、その後には幼稚園から大学まで一貫教育を行う教育事業も展開してきた。

患者を身内のように見なして関心を寄せる医療サービスを提供し、人と人との関係を大事にし、配慮してきた。慈濟人の衆生の苦を見て忍びない心ゆえである。

綿々と続いてきた慈濟の慈善事業は五十年、医療事業は三十年を迎えた。この間、無数のボランティアが感謝の心を抱いて参加している。互いに悔いなく真心で接し、貴い命ある限り一秒たりとも無駄に過ぎないよう願いながら、日々見返りを求めずに奉仕している。

【特別報道】

花蓮慈濟病院30周年

初心を忘れない

花蓮慈濟病院の医療チームは日々、台湾東部の花蓮県と台東県（花東地区と言われる）の人々の健康を守っている。三十年來の諸々の医療成果は国内外の患者に希望をもたらし、遠方からも治療にやってくる。

当時、医療が不足していた台湾東部で花蓮仏教慈濟総合病院が開業してから三十年が経つが、今でも経験豊富な医師が第一線で初心を忘れず、実践している。

病を師と仰ぎ、病と共に心も治療する。医学を志す後輩には臨床と研究成果だけでなく、それ以上に無私の心と責任を持って医療に従事する医師としての模範を受け継いでもらいたい。



台湾東部に根を下ろし 世界と連結する

◎文・楊舜斌／訳・済蓮
撮影・顔霖沼

花蓮慈濟病院は「台北でできることは
花蓮でもできる」という理念のもと、医
療が不足していた花蓮・台東地区で高水
準の医療を提供してきた。

医療技術の開発と共に医学教育を發展
させ、東部の医療水準を引き上げてきた。
様々な成果は病院建設当初の初心である
「生命の尊重」に由来する。

一〇一六年八月十七日、花蓮慈濟病
院は開業三十周年を迎えた。花蓮
市中央路に聳え立つ花蓮慈濟病院は、台
湾で十九カ所ある医学センターのうち唯
一東部にある。広大な花蓮の地で重責を
担っている。

三十周年記念行事で、花蓮県医師協会
の黄啓嘉理事長は次のように語った。

「一九九九年に医学センターが査定し



た時、人口三十数万の花蓮には医学セン
ターは必要ないという委員もいました。
しかし、慈済はこの地で医学センターと
なることを望みました。それによって病
院運営のコストは大幅に上がりますが、
慈済が考えていたのは資金の出所ではな
く、花蓮には医学センターが必要だとい
うことでした。慈済の根本的な価値は何
でしょう？ それは慈悲だと思います」

黄啓嘉は感慨深げに言った。慈悲ある

●花蓮慈濟病院30周年記念行事に林さん一家が出
席し、小児科救急重症チームが子供を救ってくれた
ことに感謝した。当時のことを思い出し、夫婦は涙
を流した。

故にどんな困難をも恐れず、恐れない故に無限の可能性を生み出しているのだ、と言う。

大勢の花東地区の住民が記念行事に参加した。二歳の林順ちゃんの家近くの魚の養殖池で溺れ、花蓮慈濟病院に運ばれた時はすでに昏睡状態だった。当直していた小児科の朱家祥主任は大至急、小児科ICUの張宇勲主任に合同治療を依頼した。一般的な治療方法であれば、奇跡でも起こらなければ、最善を尽くしても植物人間になってしまうため、「高周波呼吸器と低温療法」を行うことにした。

医療チームのこと細やかなケアの下、

残した。そして、上人が病院を建設した当初の期待通り、「台北でできることは花蓮でもできる」病院を実現した。

花蓮慈濟病院が開業して二年目の時、素晴らしい外科技術から花東地区の「脳外科病院」という評判が広がった。神経外科は二〇〇三年に花東地区で初めて放射線治療機器「ガンマナイフ」を導入した。ガンマ線を使った脳腫瘍の治療は今日まで千二百人以上に恩恵をもたらした。

脳神経外科による脳深部に対する治療法は目を見張る成果が見られ、今までに百九十一症例で成功している。そのうちの百五十八人はパーキンソン病で、台湾

林ちゃんは回復し、脳にダメージを受けることもなかった。家族は式典で慈濟病院のチームに対して、子供が二度生まれたようなものと感謝した。その子はこの病院で生まれたからだ。

花蓮で足場を固め

台湾全土に目を向ける

花蓮慈濟病院は二〇〇二年、医学センタ―に昇格、五年連続で審査に合格し、来年は六年目の挑戦である。過去三十年にわたる努力を経て、慈濟病院は花蓮の医療の歴史に新たに数多くのページを書き

全国で行われる治療の四分の一を占め、身体の行動機能を回復させている。その高水準な医療技術は国際的にも認められており、国内外の十の医学センターを指導してきた。

心臓外科チームは一九八九年、東部で初めての心臓手術を行ったが、二〇一四年までに、二千症例以上の手術を行っている。心臓内科の王志鴻副院長は様々な状況に対応するために、一九九三年、心臓外科と合同で「救心チーム」を結成した。彼は一人で十四年間、東部における環状動脈カテーテル治療による救命任務に当たってきた。その後、東部で唯一E

●心臓救急治療は一刻の猶予もあってはならない。
花蓮慈濟病院心臓外科は1989年2月に初めて心臓手術を行って以来、2014年末現在で2000症例目の手術を終えた。その手術後、医療チームは記念写真を撮って歴史に残した。（写真の提供・花蓮慈濟病院）

CMO（体外式膜型人工肺装置）がある病院として、今までに百三十八人の患者を治療してきた。

整形外科は陳英和名誉院長の下、硬直性脊髄炎や背骨湾曲の矯正手術が世界的に注目を集めているだけでなく、人工股関節と膝関節の手術器具の研究開発の分野においても様々な賞を獲得している。

花蓮慈濟病院は東部で唯一、火傷治療

センターを設置した医療施設である。作業療法士の陳美玉は陽光基金会の圧力服の製造訓練を受け、「圧力服製作室」を設立した。火傷患者が入院した時、医療面でのケアから圧力服の使用、リハビリなど、東部にいながらにして安心して治療ができる完璧な火傷治療システムができあがった。このため、昨年台北市郊外の八仙プールで起こった爆発事故で負傷した東部の若者は、安心して花蓮に戻って治療に専念することができた。

二〇一四年八月十四日、花蓮慈濟病院はダヴィンチロボットアームによるカテテル手術を開始し、ダヴィンチ手術セ

ンターを設立した。それは台湾で初めてのダヴィンチシステムであり、慈濟病院はハイテクカテテル手術の時代に突入した。

医療技術の向上のほか、人材育成のために花蓮慈濟病院は大勢のボランティアを後ろ盾に、二〇〇八年、「模擬患者センター」を設け、ボランティアを募って模擬患者の訓練を行った。各科別によく見られる患者の状況を三十種類以上用意して教材とし、心理的、情緒面での反応を医学生が患者と模擬的に対応することで、少ない手掛かりから病気の原因を探し出すのが目的である。



證嚴法師が期待を寄せる「質の向上、人材の育成」は容易なことではない。今ある基盤を元に慈済医療の愛は花蓮を中心に世界に向けて広がることを信じている、と林欣栄院長が言った。

医療人文は海外に向って広がる

「一秒に一つのストーリーを語るなら、一日、すなわち八万六千四百秒のストーリーを全部語ることはできません」。この三十年間、花蓮慈済病院の医療チームが死神から患者の生命を取り返してきた例は枚挙に暇がない。證嚴法師が病院建設

当初の苦労を思い出す時、ボランティアの献身的な協力と、それ以上に医療人員が進んで東部で奉仕してきたことに感謝している。建物ができて医療人員が来なければ、生命を救う良能が発揮されることはないからだ。

花蓮は辺鄙な場所柄、都会から医療人員に来てもらうだけの魅力に乏しい。仮に來たとしても、長く居つくことがないため、人員の流動が激しかった。その最も良い解決方法は現地で人材を育成することだった。しかし、現地の人材と言っても、東部には一般的な専門学校があるだけで、看護学校や大学はなく、人を集め

る術がなかった。そこで一九八九年九月、「慈済看護専門学校」が設立される。東部に看護人員を提供できるようになったと同時に、就学の機会ももたらした。現在は慈済科技大学に昇格している。

一九九四年十月、慈済は「慈済医学院」を創設し、その六年後に慈済大学と改名した。その中には医学部のほか、生命科学部、人文社会学部、教育メディア学部があり、各分野の人材を養成している。

二〇〇二年、花蓮慈済病院外科チームと慈済大学は、初めて「遺体模擬手術教育」を行った。そして二〇〇三年、慈済大学は全国で初めて八つの模擬手術台を

有する遺体模擬手術室を設置した。専門の医師の指導の下に、七年生の医学生が病院で実習する前に臨床技術と手術テクニックを学び、実際の患者の体でミスを犯す機会を減らそうとするものである。

学生はその課程を始める前に「無言良師」である献体者の遺族を訪問し、献体者の生前の人生を理解するようにしている。授業で目の前に横たわっているのもう冷たい遺体ではなく、人生の智慧を実践してきた模範なのだ。

二〇〇八年、「模擬医学センター」に昇格し、課程内容の範囲を医学生の実習から慈済病院の常駐医師による常態訓練課

●花蓮慈濟病院泌尿器科の郭漢崇主任（写真中央）は慈濟大学遺体模擬手術課程で模範的な手術テクニックを披露した。慈濟の医療は花蓮から始まったが、医学教育の中心的役割をも築いた。先輩医師たちは無私の心で伝承し、多くの患者に恩恵を与えた。



程および主治医の上級訓練にまで広げ、医師に最新の手術を練習してもらうことで、将来、患者の治療に応用する時の自信に繋げている。

献体は慈濟ボランティアが率先して「身で以て説法する」を行動に移した結

果、次第に中華系民族の間に根深く残る古い固定観念を変えつつある。一九九五年に始動してから二十一年、すでに三万七千人以上の人が献体同意書に署名し、七百人以上が献体した。

慈済大学副総長と模擬医学センター主任を兼ねる曾国藩教授は以前、台湾大学病院の解剖学科主任だったが、證嚴法師の招聘を受けて公立大学の退職金を蹴り、故郷である花蓮に帰って奉仕を始めた。

彼の決意はすぐに家族の賛同を得られたわけではなかったが、彼はより使命感のある仕事に就くべきだと考えた。

曾教授はチームを率いて、「全身」急速冷凍保存システムを考案した。それは海外で行われている解体した遺体をそれぞれの部位で保存するのとは異なり、台湾社会の習慣を考慮したこともあるが、学習する人が完全な遺体に対面することを期待した結果である。手が一本とか頭部が一つという標本ではなく、完全な遺体を保存するのは難易度が高い。

冷凍という手法は新しいものではないが、あれだけ大きな人体を急速冷凍するのは容易ではない。また、身体の大きさや体重の違いがあるため、急速冷凍と解凍は単純に冷凍庫から出し入れするだけで

●花蓮慈済病院の起用当日、病院ロビー左側のモザイク壁画「病人を見舞う仏陀」の除幕式が行われた。青い山と白い雲に囲まれた林の中で、仏が右手に薬の瓶を持ち、左手に清潔な白い布を持って病に倒れた出家人を丁寧に拭き、薬の取り替えを行っている絵である。顔水龍が作成したこの壁画は30年間、病に苦しむ人々を見下ろし、慰めてきた。それは慈済病院の「病を護る」という主旨を表している。

はできない。その緻密な技術は台湾独自に開発されたもので、世界唯一の技術である。寄贈された遺体は、選別から保存、急速冷凍、解凍という過程を経る。そのため完璧に処理されていないと、解凍さ

れた後の遺体は生前の感触を失ってしまう。筋肉や皮膚組織が弾力を失ってしまったり、医学生が真に迫った手術をすることは不可能だ。

二〇〇九年から花蓮慈済病院の医師が



主体となって模擬医学センターを各専門学会と合同課程を始めた。これまでに耳鼻咽喉科、泌尿器科、神経外科、整形外科、関節再建外科、脊椎外科、火傷外科、手外科、増殖療法、口腔科などがある。

模擬医学センターは常時、各方面の医学会と共同課程を持っているが、将来、国家プロジェクト的な規模の手術訓練センターに発展させ、国際医学界と共同でハイレベルな訓練をすることを目標にしている。各領域の著名な学者を招いて講義すること、台湾の医師たちが国内にいながらにして最新の技術を学ぶことができるのである。

頑に生命を守る

花蓮慈濟病院は三十年の間で大きく成長した。設立当初、ベッド数二百五十床、多いとは言えない診療科目と医療人員から始まったが、今では三十五の診療科目と三百人を超える医師、千七百人前後の従業員によって安定した経営で邁進している。

慈済医療志業は花蓮だけでなく、台湾全土に根づいた。一九九九年、花蓮県南部に玉里慈濟病院が開業し、その翌年、台東県に関山慈濟病院が開業した。そこには同じように二十四時間態勢の救急外来

があり、花蓮慈濟病院が主体となって守る花東地区の第一線を担った。事故発生時に素早く対応し、病状が安定した後には花蓮慈濟病院に送って治療をする。

台湾中西部、雲林県の田圃の中にある大林慈濟病院は二〇〇〇年に開業し、雲林県と嘉義県の辺鄙な地域の住民に恩恵をもたらした。二〇〇五年には台北慈濟病院、そして二〇〇七年には台中慈濟病院が続いて開業し、慈済医療人文を西部に広げた。

六つの慈濟病院は一貫した医療専門人材の育成と医療志業を兼ね備えた規模を有している。慈済医療財団法人の林俊龍

執行長が言うように、今年は稀なる一年で、慈済基金会設立五十周年、花蓮慈濟病院開業三十周年、そして、国際人医会二十周年に当り、これを加算すると百年になる。慈済医療は台湾で医療の模範を築いただけでなく、世界九十四の国と地域で慈済の慈善と医療がその軌跡を残してきた。その百年を基礎として、世界中の人々に医療が行き渡り、真の生命と健康、愛の守護ができることを期待するものである。

（慈済月刊五九八期より）

台風で被災した台東県で 被災者の屋根を修繕する

七月、台風一号が台東県太麻里に上陸し、瞬間風速17ノットの強風は民家の屋根瓦を吹き飛ばした。

慈濟ボランティアはすぐに見舞金を贈ったほか、九月には被災者の屋根の修繕を終える予定だ。



にまみれても手を休めません。

七月八日の台風一号が襲った時、台東県太麻里郷は最も甚大な被害を受けました。慈濟ボランティアは急遽慰問に訪れた後、香蘭、泰和などの貧しい被災者を、屋根の修繕と補助の支援対象としました。そのほか、台東市の被災家屋の損害の程度

小雨の降る中、三人合わせると二百歳を超える中高年のボランティアが、屋根の上で朽ちた竹を取り除き、下では女性

ボランティアがそれを受け取っています。黙々と息の合った四人は、汗と雨水

を調査して援助の対象とし、八月下旬に修繕を開始して九月末にはすべて完了する予定でした。

九月に入ると時折の雷雨で、支援計画の進度に支障をきたしていましたが、雨

足が弱まるとすぐに仕事に取りかかり、一日も早く被災者が安らかな我が家で生活できるよう急いでいました。

一番大切なこと

災害発生から二カ月後の九月七日、私たちは慈済基金会と慈善志業発展所の人たちと泰和村を視察に訪れました。宜蘭からきた四人はちょうど仕事中で、組長の陳龍泉は連日の雨で足を滑らせ、くるぶしをねじってしまいました。それでも仕事を休みませんでした。

白髪頭の陳龍泉は六十六歳で、建築の

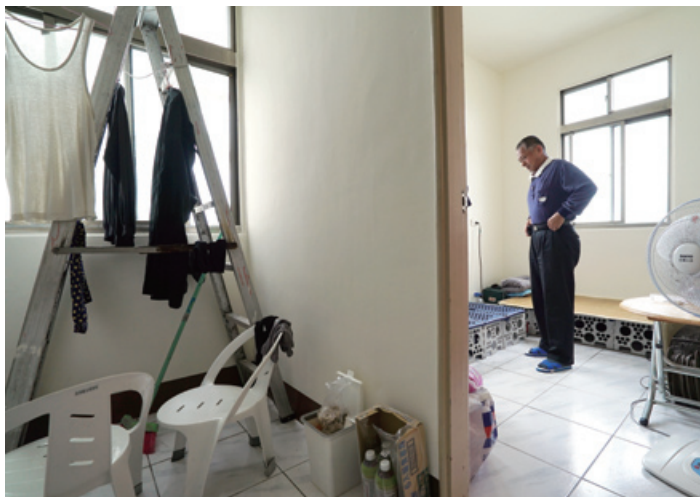
仕事に携わって三十二年、若い時のペンキ塗りを合わせたら五十二年も建築業界で活躍してきたことになります。慈済に参加して二十年以上になり、宜蘭県にある慈済の三星、五結、台東会所の建設に関わったほか、フィリピンのハイエン風災、ネパール震災後の臨時教室の組み立てなどの活動に参加してきました。

「私は国外での支援活動に度々参加してきました。今回、わが国の太麻里で被災家を修繕する人手が必要と聞き、喜んで参加しました」と言いました。同行した二人は七十歳の劉文景と、電力会社をリタイアした六十二歳の余滄波です。

余滄波は「私が六年早めにリタイアしたのは、以前やっていなかったボランティア活動を穴埋めするためです」と言い、劉文景は「私は年をとっていてもますます健康になっています。若い者には負けませんよ」と言いました。

三人は屋根の破損した部分を取り除き、瓦を敷いて雨漏りを防いだ後、中の一層を断熱材、その下の層を光沢のある白色板に仕上げています。陳龍泉は「屋

●工事の間、借りている家の中に簡易ベッドを置いて寝起きする。簡素だが十分満足している。



根が完成し、室内の電灯をつけて天井を見上げたら、明るいですよ」と喜んでいました。

室内をかたづけしていた五十四歳になる慈済委員の游麗華は、「證嚴法師は、被災者の家は最も品質の良い材料を使って修繕するようにとおっしゃっておられます。これは坪当たり換算したらたいした物ですね」と褒めていました。

修繕期間中、太麻里の泰和村で六千円の家賃で家を借りて寝泊まりしました。三度の食事は香蘭村のシングルマザーが慈済の環境保全所で作ってくれるので、衣食住の心配をすることなく、思い切り

長時間仕事に打ち込むことができました。

慈済は四回に分けて太麻里郷の被災者家屋の修繕を予定しています。一回目の受け持ちは屏東県のボランティアが十三戸、二回目は宜蘭県の十三人のボランティアが二組に分かれて十二戸、三回目は六戸は現在完成間近で、四回目は九月十日に修繕を予定する家の検査にきます。全部で三十五戸の全壊した屋根は九月末に修繕が完了し、台東市の四十戸も同時進行中なので、ボランティアたちがいつ帰宅できるのか、予定がつきません。



●屋根の上で腐った竹を取り除く陳龍泉、余滄波、劉文景。3人は暑い日も雨の日も休まずに仕事をし、被災者に早く安心して住める家を渡したいと思っている。

弱者家庭を庇護する

泰和村に住む潘さんは屋根が吹き飛ばされ、歩行器を使って歩く母と五十を過ぎた半身不随の弟と三人、狭い倉庫の中に避難していました。生活は慈済の毎月の補助と潘さんが日雇いで得たわずかな収入で暮らしています。

彼女は慈済のお年寄りたちが自分の家の修繕をしてくれているのに感動して「皆さんが私たちのために、こんなに一所懸命修繕してくださり感謝にたえません。これからは風雨にさらされて暮らす心配がなくなりました」と言いました。

香蘭村の戴静子おばあさんは嬉しそうに、私たちを家の中に案内して「慈済の人たちが屋根を修繕してくれたので、昨日客間を調えました。天井を見て下さい。綺麗でしょう」と、おばあさんはワールド・ビジョンと慈済の補助金で室内のペンを塗ってから屋外に置いていた家具を家に入れました。「このベッドは人から贈られたベッドで、濡れてカビが生え使いなくなりましたが、まだ一つありますよ」と言いながらキッチンへ案内してくれました。暴風で屋根が吹き飛ばされていました。今は新しい屋根があり、安心して食事の用意ができます。



●台風の被害を受けて家具は散乱しているが柱はまだ丈夫だ。慈済が修繕した白い天井と屋根。いつ風雨が襲っても怖くない。

修繕が終わっている陳さんの家に行く
と「妻がお産前で、古くからの言い伝え
では妊婦のいる家の中は動かしはいい
ないので、慈済の人たちは修繕をお産後
まで伸ばしてくださいました。三日間で
壊れた瓦を取り除いて新しい屋根に取り
換えてくれたので、妻は安心して産後を
過ごせます」と言いながら出迎えてくれ
ました。陳さんは建設現場で働いていま
すが、台風に見舞われ、三人の子とお産
前の妻を世話するのに忙しく、仕事に出
られませんでした。妻は無事男子を出産
しました。「私はまだ四十一歳で体力はま
だまだ十分にありますから、これからも

家族のために頑張ります」と力強く言い
ました。
陳さんの裏方に住んでいる呉金茶おば
あさんは、「私はまだ寝る所があるので、
急がなくてもいいですから、修繕は陳さ
んに先を譲りました」と話し、とても情
け深いおばあさんです。
慈済ボランティアと村人は風災直後、
おばあさんの家の掃除のため、家の前に
家具などを運び出し、掃除が終わると家
具を中に運び入れました。壊れた屋根は
修繕の順番がくるまで一時しのぎにビニ
ールを被せました。そんな不便な中でも、
三十七、八度の猛暑の中で仕事をしてい

●修繕を終えた新しい屋根の前で嬉しそうに話をす
る戴おばさん。



る人たちを、おばあさんは熱心に労って
いました。

安らかに過ごし、業に勤しむ

香蘭村の被災者の蘇心蘭も修繕の順番
を待っていました。彼女の台所の屋根は
飛ばされ、寝室二間と客間の屋根は瓦が
壊れ、雨漏りがひどくて部屋は湿気で充
満し、一日中扇風機を回しても微くさは
消えません。

彼女は月二千五百元の家賃の負担はま
だいいとして、被害に遭った畑の元手は
ゼロになりました。私たちが被災した七

月に農地の調査に行った時は、悲惨な状態でした。この度再会した彼女は笑顔で、現在慈済の環境保全と自然農法の栽培を学んでいると言いました。

親切な人が家の後ろにある畑をただで提供してくれたので、紅キヌアを植えることにしたのです。これは経済性に富んでいて、収穫後は慈済科学技術大学と合作して製品の研究開発をすると言いました。

「紅キヌアは農薬も化学肥料も肥しも一切使わず、純粹の天然でないと駄目です。藁や果物の皮を有機肥料として覆い、除草剤も使わずに手で草取りをしなければ

なりません」と嬉しそうに話していました。

九月中旬にまた台風が接近するとの予報があり、慈済人はまだ修繕していない屋根をひとまず鉄板で覆って強風に備えました。

善のある人々と愛の団体の援助によって、太麻里の人々は今、畑作業に忙しく、しゃかとう 釈迦頭の農園は枯れ枝を取り払い、来年の収穫に備えています。修繕組は進度を早めています。陳龍泉は「被災者たちが安らかに過ごせ、仕事に勤しめる日が来た時、私たちは家に帰ります」と言いました。

信仰について

問い：「神様に祈ったり神託に頼ったりすれば、問題を解決することができるのでしょうか」

私たちは、現実に向かうことのできる勇氣と意志を培って、あらゆる逆境を歓喜の心で受け止めなければなりません。事あるごとに神様にすがっていますと魔につかれ易く、人の言いなりになってしまいます」



古民家

現代のレトロスタイル



●台湾中西部彰化県の溪州に住む陳さん親子。「安心して住める」と、修繕された竹組みの家に大満足。ご近所も皆で工事の様子を見守ってくれたので、スムーズに修繕が行えた。

◎文・李委煌／訳・黒川章子
撮影・黄筱哲



雲林や彰化などの地方には、伝統的な竹組みの家が残っている。壁面が竹と泥で作られていて低コストな建築法は、豊かでない時代の台湾人を支え続けて来た技術を見ることが出来る。

ボランティア達は修繕する時にうっかり壊してしまわないよう、家主の許可を得て打ち合わせをし、細心の注意を払ってその原型を保つよう心がけている。そうすることで古い建物が伝える歴史という徳の芳香を受け継ぐうとしている。

竹で骨組みを作った壁面を残しながら新たに鉄筋で補強すると、レトロとモダンの両方の要素を兼ね備えた建造物に生まれ変わったかのような。



黒ずんだ竹を淡いオレンジ色に塗り替えると、家の表情に色彩が加わった。彰化県の二林にある旧呉邸。青い空の下に佇む趣のある古民家は、この地区の観光スポットにもなっている。



屋根瓦の修復



伝統的な煉瓦造りの家では屋根瓦に穴があくと水が漏るので、瓦を取り除いてトタン屋根にするという手っ取り早い修繕方法もある。しかし中部の慈済ボランティアは、まるで外科医のように注意深く傷んだ箇所をいたわり、補填をして、この建物を救おうと力を尽くした。安易に義肢に取り替えたりしなかったのだ。

ボランティアたちは屋根瓦の職人に頼み、伝統的な工法で瓦を補填したあと防水措置を強化してもらった。すでに数十年の齢を重ねた古い家をそのままに、瓦の姿も百年の歴史を持つ技術をもって蘇らせたのである。台湾の伝統建築の美学を保存した事業といえるであろう。



古民家の瓦は歳月には勝てず、度重なる台風の襲来もあって傷みが激しい。雲林にあるこの家は、壁は朽ち果ててはがれ落ち、屋根は雨漏りだらけなので、床にいくつもバケツを置いて水を受けている。もっとひどい箇所は屋根にビニールをかけて雨をしのいでいる。

室内は快適に



雲林県の四湖に住む曾さんは、幼い頃から重度の下半身麻痺を患い、数十年間床の上をはって移動する生活を続けて来た。就学することもかなわず字も読めない。しかし明るく純朴で正直な彼は、電動車椅子に乗ってお寺で金紙を売りながら自力で生活している。慈済ボランティアが彼のために家を修繕した時は、便器の高さを調節し、室内をバリアフリーにするなど、生活しやすいようにした。



台湾は近代的な高度成長を遂げたとはいえ、まだまだ地方には貧困層が存在し、生活するのに最低限の設備を供えていない住居が多い。居住空間も狭く、片づける観念もなく、日々の健康にも影響している。

慈済ボランティアは住居の修繕を援助しながら、その家の空間に合わせて必要な家具を取り寄せる。例えば外食に頼らず自炊できるようにガスコンロを設置したり、冬に冷たい水で入浴しなくていいように湯沸かし器を設置したりするのだ。また、三世代が同居している家庭では子供の数も多いので、希望を聞きながら修繕の際に部屋の間仕切りをするなど、プライバシーが守られるよう配慮する。

修繕を重ねる間で大切なことは、そこに住む人たちと互いに心を通わせながら幸せの形を実現していくことなのである。

【健康ボックス】

すばらしい熟年

熟年になると、人生で最も自由な時期に入り、「治療よりも予防」と考えるようになります。自分の体を大切に、三食とも体に負担のない菜食を取り、仲間と楽しい時間を過ごして健康に長生きできるようになります。

◎口述・陳慶元（台中慈濟病院核子医学科主任）
整理・洪淑燕、林秀珍、謝俊新、楊翠玉
訳・葉美娥／撮影・邱如蓮



ば、老後を楽しむことができるのです。

生 老病死は人生において避けられないもので、とくに「老い」は段階を経て誰もが実感することです。人間は三十歳を過ぎれば、体の機能が老化し始め、多くの臓器の働きが毎年六・二五%のスピードで衰えていきます。これは自然な過程ですが、心を若々しく保ち、楽しい気持ちでしかも自信があれ

なく、本当の自分らしい人生がやってくる、と来たとすべきです。子供が大きくなると、背負ってきた重荷が下りた時、人生で最も自由で楽しい時期が今から始まるのです。手足が動ける時に自分の先のことをよく考えておきましょう。足が動かないと息苦しくなりやすく、手が動かないと脳の反応が鈍くなります。暇な時は家に閉じこもらずに外に出て、環境保全をし、幸せの種を蒔いて、人の話を聞いて、人と多く触れ合いましょう。家にいても、料理を作る楽しさも味わえます。



自然の果物と野菜を良薬に

多くの中高年は体にとって栄養が補給できるかどうかを基準として食物を選びがちですが、栄養食品を食べれば健康になるとは限りません。ふだんの食生活で油っこいものや甘いもの、あるいは塩辛いものを取りすぎると、消化不良を起こし、毒素が排出されにくくなります。毒素が体内にたまった結果、血液がドロドロの状態となって、血管がつまりやすくなり、脳卒中や心臓病を発症するリスクも上がります。毎食腹七分目から八分目がちょうどよく、栄養のバランスによく

注意すれば、体への負担を減らせます。

肉食よりも菜食の方が体の仕組みによく合います。菜食は昔のようなお粥に漬物ではなく、今日ではもっとたくさんの種類の食べ物を選ぶことができます。とくに新鮮な野菜や果物などが、抗がん効果の「フィトケミカル」を含有し、家族皆一緒に「レインボー飲食」を摂取するをお勧めします。「レインボー飲食」とは、虹のように毎食違う色の野菜や果物を摂ることです。赤、オレンジ、黄、緑、黒、白など、色の違う多様な食材で、バランスよく栄養を摂ることができるのです。



野菜や果物の皮は、植物が風害、日焼け、虫害などを防ぐための保護カバーで、しかもフィトケミカルが最も多い部分です。食べれるのなら、洗った後の皮は体に一番よい食べ物となります。

もう一つ気をつけた食事の基準は、四低い——低蛋白質、低脂肪、低塩、低糖、高植物繊維です。日本の久

司道夫博士が提唱した健康長寿のための標準食メニューは、全粒穀物、野菜類、豆類、海藻、味噌汁をメインにしています。重要なのは天然の食材を食べること、加工食品を食べないことです。

日常的に市販薬を飲むのも止めましょう。年配の方はよく常備薬を準備しておいた方が安心だと思っています。

「君、血圧が高いね。私の所によい血圧の薬があるよ」

「風邪を引いたの？ 風邪薬なら持っているわよ」

「糖尿病の薬が切れたら、おすそ分けしてあげるよ」

たとえ病名が同じであっても、患者が異なれば薬物に対する効果が違います。服薬については必ず医師の診断処方に従うことです。

早期発見が「良かった」になる

車にも定期的な修理が必要なように、人間の体もメンテナンスが重要になります。熟年に入ると「治療よりも予防」をもっと重視すべきです。

癌は三十四年間、台湾人の十大死因のトップです。癌細胞が一センチ大の大きさに育つまでに九〇十年かかります。で

すが一センチから十センチ大になるには、三年しかかからないのです。

核医学の専門医である私は、大勢の患者が診察や検査に来た時には、すでに病状がひどくなっているのを発見しました。「どんな多くの金でも先知は買えぬ」という諺があります。最も良い健康への意識は、定期的に健康診断を受け病気を早期に発見することです。早期発見、早期治療によって完治するチャンスが上がるのです。「自分の体は元気だ」「大丈夫」「面倒くさい」と思わないでください。小さな病気を気にしないままでしたら、治療するタイミングも過ぎてしまうのです。

(一) いくつになっても自分を大切にする、(二) 良い人間関係を作る、(三) 勇気を出して目の前のことに向かう、(四) シンプルな生活を心がける、(五) 負担を減らす、(六) 今回の時を楽しむ。この六つのポイントを掴んで、自分の体は自分で守り、人に手伝ってもらいたい時には勇気を出して話しかけましょう。知恵のある毎日を過ごし、健康に楽しく長く生きられるようにしましょう。

中高年向け野菜メニュー

◆十六ささげいりの玄米お粥

材料：

1. 玄米 1 合、キヌア 1/3 合、はと麦 1/3 合
2. 十六ささげ、干しいたけ、エリンギ（または生しいたけ）、にんじん、ゆば

調味料：塩、こしょう 少々

作り方：

1. 干しいたけは水で戻しておく。材料をすべて適当な大きさに切る。
2. 玄米、キヌア、はと麦に水を加え、20～30分煮る。
3. しいたけ、十六ささげ、エリンギ、にんじん、ゆばを入れて、再びふたをし、5～10分煮る。
4. 塩、こしょうで味つけて出来上がり。





【天涯の慈濟】

星空の下の屋根のない家は 楽しい我が家になった

オスティンおじいさんは子供たちに見捨てられ、屋根のない家で一人で暮らしていた。

慈済ボランティアが訪問すると、おじいさんは毎回「あなたたちにずっといて欲しい」と言った。

おじいさんの涙を見て、慈済ボランティアは「さよなら」の言葉が言い出せなかった。

ジンバブエ |

ジンバブエ共和国は、アフリカ大陸の南部に位置する共和制の国家である。首都はハラレ。民族は主に黒人。キリスト教50%以上を占める。インフレ率と失業率が高く、人々は貧しい生活を送っている。

◎文・Precious Dzutu / 訳・慈願 / 撮影・Beauty Kulemeta

おじいさんの悲しい過去

ジンバブエ・テンブウェ村の荒寥とした草むらの中に、ぽつんと寂しげに立っている一軒の家があった。水道も電気もない粗末な茅葺の小屋だった。二〇一五年、ジンバブエの慈済ボランティアは初めて訪問ケア活動を行った際に、一人で小屋の中で住むオスティンおじいさんを発見した。

●マスクをつけた慈済ボランティアが支援物資を携えてオスティンおじいさんを訪問し、家の掃除をしている。

九十六歳のオスティンおじいさんはマ
ラウイの人で、三十歳の時、新しい職を求
めて千キロ離れたジンバブエにやって来
た。コックの腕を生かして首都の東のマ
ロダラ町に腰を落ち着けた。その後、家
を持ち、三人の子持ちの女性と結婚して
家庭を築いた。

七十六歳の頃、再び職を失った。家族
がしばらくの間、暮らしに困らないよう
にしてから、ハラレイへ職を探しに行っ
たが、寄る年波に勝てず、また失業の憂
き目を見る。

マロダラの伝統では女性優位であるた
め、妻は子供たちの目の前で無用になっ

た夫を罵るようになった。子供たちもだ
んだんと軽視するようになり、自分の手
で作った家から追い出されてしまった。

一九九六年、オスティンおじいさんは
テンブウェ村のはずれに身を寄せる簡単
なレンガの家を建てた。しかし何年か後
の水災でレンガの家は流され、今の茅の
家になっていった。心に深い傷を負ったお
じいさんは、妻と子供たちを許せず、日
夜心の中で彼らを罵っていたが、どうす
ることもできないまま、失意のまま日々
を過ごしていた。

おじいさんの境遇を知った慈済ボラン
ティアは、長期ケアの対象者に登録して、

毎月訪問しては食べ物をおぼえたり、家の
掃除や整理などをして、やさしく寄り添
っておじいさんを慰めていた。

ビニールの家の「馳走」

オスティンおじいさんはこれまでずつ
と自分のことを、子供たちに棄てられた
世界で一番哀れな人間だと思っていた。
しかしボランティアは「私たち皆があな
たの子供でしょう？ いつでも来ますか
ら」と慰めていた。

初めて訪問した時、おじいさんは皆が
真心から自分を心配し、来てくれている



ことを知り、ビニールで覆った家に入れた。ボランティアが中に入って見たのは、ポリバケツと簡単な炊事用具だけ。おじいさんが自分は菜食主義だと言った時、ボランティアはおじいさんが万物の生命を憐れむ人だと知って喜んだ。

ボランティアは家の中の掃除を済ませ、食事の用意をしながら、おじいさんの悲しい過去の話を聞いてあげた。おいしい匂いは寂しい家の中を温かくし、持ってきた蚊帳を家の中に吊るすと、さらに気持ちの良い家になった。ボランティアのやさしさに、おじいさんは顔を綻ばせた。

「天下に私の愛せない人、信じられない人、許せない人はいない」。この證嚴法師の智慧と法語をボランティアが繰り返し話すうちに、おじいさんの心にあったわだかまりや恨みは次第に消えていった。

冬が近づく頃になると、ボランティアは暖かい上着を贈った。こうした小さな思いやりにおじいさんの心はほだされ、心の扉を開けるようになった。そして「私はこの生涯にこんなにたくさんの愛を受けられるとは夢にも思わなかったよ」と言った後、「あなたたちがいつまでもいてくれたらどんなにかよいことか」とつぶやく。

ボランティアは各自の家に帰らなくてはならない。おじいさんが涙ぐむのを見て、ボランティアは「さよなら」を言うのが心苦しかった。

「私は慈済の子供らを待ちかねていた」

今年の二月、ボランティアがおじいさんを訪問した時、屋根が強風に吹き飛ばされて四方を囲う茅だけが残っている中で、慈済の子供らがくるのを待っていた。

「やっときましたね」と言うおじいさんは、体が衰え生活がどんなに苦しくて





も、ボランティアの姿を見ると笑みをこぼす。強い太陽の光を防ぐために家の中をビニールで覆っていた。ボランティアが家の中に入ってビニールの覆いを取ると悪臭が漂ってきたが、それをものともせずにマスクをつけて掃除を始めた。

おじいさんは、「私を訪ねてきた子供たちを許しましたよ」と言った。二十年以上も途切れていた親子の情は、ボランティアの努力によって復活したのだった。ボランティアはおじいさんのために喜んだが、まずは急いでこの家を修繕しなければならなかった。

梁や柱を建てて風雨から守る

緻密な計画を立てて今年の三月十二日、慈済ボランティアの朱金財は大勢の仲間を連れて家を再建するため、おじいさんを訪れた。各自家にある道具を持ちより、建材を車から上げ下ろしたり、トウモロコシの粉や砂糖や塩や食用油などの生活物資を運んだり、大にぎわいだ。

家の強度を確かめている時、柱にシロアリの巣を発見して新しいのを添えて補強した。また、快適に過ごせるように屋根を高くした。灼熱の太陽の下で、汗を滴らせながら、誰もが奉仕の機会がある

ことを喜んで作業していた。

一日半かかって屋根がやっと完成した。さらに福祉ベッド（簡易ベッド）を部屋の中に置き、おじいさんは地べたで寝る必要がなくなった。木の陰に座って、じっとボランティアたちが仕事をしているのを見ている表情は、信じられない光景だと思っているようだった。

昼ごはんの時、おじいさんはボランティアに「先週、娘と娘婿が私を訪ねて来た時、私は『お前たちの仕打ちを許す』と言いました。なぜなら私は今は楽しく、そして幸せだから」と言った。家族の者たちは、慈済ボランティアが父親を世話

していることを知って、この世界に「愛」が存在することに驚き、感動した。そして、いったいどんな団体が、父親に自分たちを許す気にさせたのか知りたいと思っていた。

おじいさんは、慈済ボランティアを家族の者に会わせ、そして心から證嚴法師と慈済に感謝したいと願っている。家の修繕は彼ら家族の心をも修繕することができた。おじいさんは、「私は證嚴上人にお会いする機会はありませんが、皆さんの中で上人にお会いする人がいたら、私の心からの最大の感謝をお伝え下さい」と頼んでいた。



「私は屋根のない家で太陽に焼かれ、雨に濡れた日々を過ごして来ました。今日からやっと屋根のある家に住むことができて嬉しいですよ。鉄板の屋根の下には嬉しい人たちがいて、おじいさんはもう孤独ではなくなりました。心の中に建てられた愛と許しの家は、大きく燦然と輝いている。

（慈済月刊五九七期より）

ブラダーウィリー症候群の子供たち 静思堂キャンプ

ブラダーウィリー症候群の子供たちが抱き合って「愛」を表現する姿に、ボランティアたちは感動しました。

キャンプの間はハラハラドキドキでしたが、苦労の汗より喜びの笑顔、心に負担を感じることをより温もりを感じるこのほうがたくさんありました！



(撮影・蔡羽承)

とを知りません。ボランティアのチームリーダーは事前に言い聞かせました。「もうすぐお父さんお母さんに会えるから、騒がないで……」。両親が教室に入ってきて後ろの方に着席すると、前のほうに座っていた敦君は、司会者の開会の言葉を待てません。

立ち上がって叫びました。「お母さん！ここでの二日間、楽しかったよ！お母さん大好き！」ブラダーウィリー症候群の子供たちは、このように単純でこだわりの強いのが特徴です。抑えきれない愛のエネルギーがそこにいた人たちの心に響き、心を激しく揺り動かししました。そ

日 曜日の午後、高雄静思堂で一泊二日の「ブラダーウィリー症候群慈濟人文キャンプ」が無事に終わろうとしていました。教室の子供たちは、緊張と期待で落ち着かず、絶えずスタッフにこの後の活動の内容を尋ねます。

別のスペースには家族や友人四十人が到着していましたが、子供たちはそのこ

「ブラダーウィリー症候群」について

「ブラダーウィリー症候群」は、先天性の珍しい疾患で、治療は不可能だとされています。

15 番染色体の欠陥から満腹感が持てず、食欲をコントロールするのが困難です。また、知能、身体、情緒、言語、学習等の多重障害があります。

「食べても食べても満腹感が得られない」ことがこの疾患の最大の特徴です。「小胖威利病友関懐協会（ブラダーウィリー症候群患者支援協会）」理事長の蔡立平氏によると、ブラダーウィリー症候群の子供は出生時から肌の張りが不足しています。また、体内の「NDN タンパク質」が正常の人より高く、脳を刺激するので、食べるための様々な異常行動を引き起こすのです。

「子供は我慢できずに食べ続け、食べ物を買うためにお金を盗んだり、ゴミ箱をあさったりすることさえあります」と蔡立平氏は言います。食べ続けることで過度の肥満になり、体質的に新陳代謝率が低いこともあって、メタボリック症候群、糖尿病、高血圧等の疾病を引き起こしやすくなります。保護者は冷蔵庫に鍵をかけでもしなければ、食べ過ぎを防げない場合もあります。このほかに、感情のコントロールが苦手な頑固なものもブラダーウィリー症候群の患者の特徴で、ちょっと気に入らないことがあると癇癪を起こすこともあります。

両親は子供の世話をするために、ほとんど1年中24時間休む暇がなく、その苦労は計り知れません。台北慈済病院小児科主任でもある蔡立平氏は、保護者の心身共に疲弊した姿を目にして、リラックスできる機会を作りたいと、何年も前から「レスパイト・キャンプ」を台北、台中慈済医院で実施しています。そして、今年8月20、21日には高雄で初めて行われました。

の場の空気は少し乱れましたが、みんながそれを受け入れました。子供は「愛」を表現したかったただだからです。

子供の数の数倍ものスタッフ 五つ星級の手厚いケア

時は今年の六月に遡ります。慈済基金会と小胖威利病友関懐協会（ブラダーウィリー症候群患者支援協会）が共同で「ブラダーウィリー症候群慈済人文キャンプ」を行いました。初めて病院から高雄静思堂に場所を移したキャンプ。ボランティアは慎重に計画を練り、準備のため

七回の会議を開きました。そして、イベントの一週間前の八月十四日にはチームリーダーを担当する六十人の慈済ボランティアが集中トレーニングコースを行いました。

ブラダーウィリー症候群の子供を持つ莊さんが事前に招かれ、ボランティアに対し、子供たちに起こりうる状況を説明しました。「ブラダーウィリー症候群の子供は夜中に起きて盗み食いしたりしますか？」「するわよ！寝付きはいいんだけど、朝まで寝ていると思つちやいけないわ。ちよつと目を離れた隙に、すぐに食べ物を探しに行くの。だから親は冷蔵庫

●保護者は教室の外に立って子供たちの二日間に行たるキャンプの活動を見守り、なかなか立ち去ろうとしなかった。(撮影/周幸弘)



分かりやすくなるようにと、絶えずプログラムを修正してきました。」プログラムは、子供たちが達成感を得られるように、体を動かしたり、自ら手を動かして何かを作ったりする方向で組みました。

五歳から二十歳過ぎまで、たった十五人の子供たちに対し、百七十三人ものスタッフが動員されました。一人の子供に、お父さん役かお母さん役の二人のチームリーダーがキャンプ全体を通して付き添い、食事面は栄養士が、健康面は慈済人医会が管理しました。プログラムは知育に富むもので、子供たちの恐怖や見知らぬ場所での不安を和らげるよう雰囲気作

やキッチンに鍵をかけているの。うちは部屋のドアに鍵をかけてるわ……」

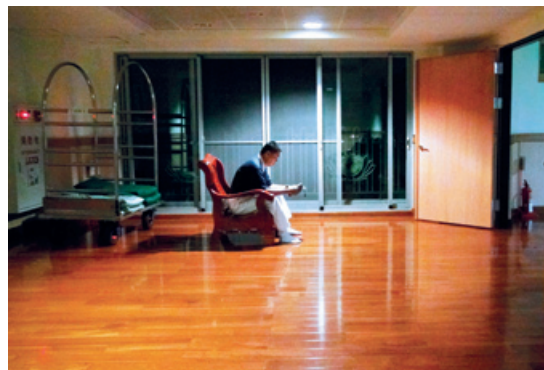
荘さんはボランティアに対し、キャンプの間、子供たちは食べ物をはしがるけれど断固として拒否してほしい、ルールを作ってしまうえば、実は子供たちはきちんと守るのだと言いました。

プログラム担当ボランティアの頼裕鈴さんはこう話しました。「このような子供たちをサポートするには、私たちでは力不足ではないかと心配して、専門家をお願いしたんです。しかし、学ぶ過程で子供たちの行動能力は私たちが思っているほどよくないことが分かり、より簡単に

●50個の日本式弁当箱が整然と並ぶ。赤、黄、白、緑の彩り豊かな野菜や果物と主食のパスタだ。キャンプ中の食事は、栄養士によってカロリーが厳密に管理され、揚げ物や砂糖の多く含まれたものは一切ない。(撮影/鄭杏書)



りにも気を配りました。このように入念な準備をしたのは、一年中苦勞している保護者に一息ついてもらいたいという思いやりの心からです。



●子供が夜中に起きてきて食べ物を探さないように、スタッフが交代で宿舎外を見回り、読書しながら夜の警備をした。宿舎内のキャンプカウンセラーもゆっくり寝ていたわけではない。家を離れた経験がほとんどない子供たちの世話をしたのである。(撮影／楊万生)

幸せを感じたら手をたたこう

キャンプ初日の八月二十日午前九時、保護者と子供たちが続々と到着し、果物の形の被り物を被ったボランティアが整列して出迎えました。高雄区慈済人医会のメンバーが子供たちが使う処方箋や医薬品を受け取った後、チームリーダーが保護者に二日間のプログラムを説明し、保護者から子供の生活習慣と注意事項について聞き取りを行いました。

チームリーダーの林彦璋さんは、熱心にメモを取っていました。初めは不安に

思っていた彼も、保護者の話を聞いて少しずつ自信が出てきました。「詳しいことを知れば知るほど、子供たちとどうやってコミュニケーションを取ったらいいか分かってきました。自分の責任を果たして子供をしっかりと世話することで、子供

たちに楽しく過ごしてもらい、ご両親にもゆっくり休んでもらいたいと思いました。」

保護者の中には初めて子供と離れた人もおり、離れがたく、心配に思ったのは無理ありません。教室の窓越しに、チームリーダーと子供たちとのやりとりを見守っていましたが、ほどなく携帯電話

で写真を撮り始め、安心の笑顔を見せるようになりました。

プログラムは、子供たちの意識が食べ物に向かないように、動きのあるものを主体にしました。授業の合間の時間には、リズムに乗って体を動かし、教室には軽快な音楽が響き渡りました。年配のボランティアも子供たちと一緒に踊りました。手を上げて、回って、しゃがんで、ジャンプして、とまるで子供のころに戻ったかのようです。ボランティアの簡素霞さんはこう話します。「子供たちとアクティビティやゲームをしていて、一番楽しかったのは実は自分自身だったと思い

ます。」

ブラダーウィリー症候群の身体的特徴は、目つきがとろんとしていて、動作が遅く、手脚が細いことです。四肢の力があまりなく、バランス感覚にも欠けているため、大きな動作は難しいのですが、それでもみんな楽しそうに踊っていました。大人気だったのは、『幸せなら手をたたこう』という軽快な曲です。子供たちは一度踊った後、もう一度踊りたいとねだり、何度も踊っても疲れませんでした。チームリーダーの劉淑禎さんはもうすぐ小学一年生になる廖君に付き添いました。言葉でうまく意思表示ができず、体も

弱くじつとしていられないため、劉さんはしばしば廖君を抱いて落ち着かせ、一時も気を抜くことができませんでした。その後、二人のお父さん役の男性チームリーダーが廖君のサポートに加わり、彼を追って部屋中を駆け回ることになりました。ボランティアたちは、両親が長年に渡りどれだけ苦勞してきたかを実感し、このようなキャンプを行うのは確かに大変だが、とても意義があることだと感じました。

帰ったら両親にありがとう

キャンプ中は、高雄慈済人医会のボラ

●キャンプ期間中、ボランティアたちはみな若返った。子供たちと歌ったり踊ったり、自分の体力が試された。また、ブラダーウィリー症候群の子を持つ親の、子供を大切に育てる気持ちを実感することができた。(撮影/周幸弘)



ンティアが基礎運動能力、食事のコントロール、口内衛生と検査の三方面を担当し、子供たちに運動や歯磨きをさせ、保護者の負担が軽くなるよう、自己管理と健康維持について教えました。

活動はブラダーウィリー症候群の子供たちの家庭に役立っただけでなく、ボランティアにとって、どのように彼らと接すればよいかをより深く理解する機会になりました。あるチームリーダーは、こう語りました。「子供たちはうまく意思表示をできないかもしれないが、彼らが気持ちを表現する権利は尊重しなければならぬこと、『平常心』を持って接するべ

きで、『特別』だと思ったり『区別』したりすれば、逆効果になることもあり得ることに、二日間の活動を通して気づきました。」

子供たちが抱き合って愛情を示したがつたことにも、チームリーダーたちは感動しました。キャンプの間はハラハラしましたが、苦労や心の負担を感じることよりも笑顔や心温まる出来事のほうが多く、チームリーダーを引受けて本当によかったと感じました。

「子供たちの一番素晴らしいところは、私たちが耳ではなく自分の心で聞けるようにしてくれたことです」。こう話すチー

からそう言いました。

子供たちが愛を教えてくれた

二日間のキャンプの様子をまとめたできたてはやの動画。子供たちと両親とでそれぞれ違う思いを持ってこの動画を見ました。子供たちは、仮面舞踏会の扮装をする自分たちを見て、恥ずかしがつてクスクス笑います。両親は一生懸命学んでいる子供たちの姿に、はらはらと涙を流しました。

続いては簡単なお茶をふるまう儀式で、育ててくれた両親の恩に感謝するこ

ムリーダーの陳昱豪さんは大学を卒業したばかりで、キャンプ活動の経験がなかったわけではありませんが、今回はずいぶんと勝手が違いました。今までよりもずっと注意を払って、彼らがいかに体を使って気持ちや考えを表現するのかを体得しなければならなかったのです。

陳昱豪さんは今回のキャンプに参加できたことを喜んでいました。最大の収穫は、両親が心を砕いて彼らを世話していることが分かり、自分も小さいころ、家族からこのように守られて育ったことを思い出したと言います。「家に帰ったら両親にありがとうと言いたいです」。彼は心

とを子供たちに教えます。お茶を運ぶ手は、普段は常に誰かのケアを必要とする手です。しかし、今はいたわりを覚え、抱き合うことを覚え、感謝を覚えました。両親に手渡された手作りのカードとプレゼントは、字は乱れているし、決してきれいとは言えないかもしれませんが、子供たちの愛の印です。プレゼントを受け取った両親が子供たちを抱きしめた時、万感胸に迫るものがあつたことでしょう。

式典の最後には、ある子は疲れて我慢できずに机の上に突っ伏して寝てしまいました。別れの前、司会者は舞台下の保護者たちに「感想をシェアしてみたい方は

「いませんか？」と尋ねてみました。すると思いがけないことに、誰もが語り尽くせぬ感動を持っていたのです。気持ちが高ぶりうまく言葉にならないながらも、小沢威利病友協会と慈済ボランティアに対する尽きない感謝の気持ちを話しました。

「赤の他人の皆さんが、私たちの子供をこんなに愛してくれるなんて思いもよりませんでした！」「私たちが休めたことより、子供たちが人文キャンプで成長したことが最大のプレゼントです！」「慈済に感謝しています。慈済の皆さん以外には、プラダ―ウィリー症候群の子供を

受け入れてくれる人はいません」。多くの保護者があふれ出る感情を抑えることができず、ついには子供と同じように、勇敢に「愛と感謝」について話したのです。手を振って別れても、すべての「愛」は続きます。子供も、両親も、ボランティアも、すべての人がここで出会ったことで、どうやって他人に愛を差し出したらいいかを知ったからです。

（文／章碧雲、張貴珠、林清雄、王滢琇、李秀裡、林宝華、李孟倫、鍾文英、蔡鳳琴、王淑蓮、林佳燕）



【證嚴法師のお諭し】

◎訳・慈願／絵・林碧恵

災害が少なくなる良い方法

災害を少なくするためには

ただ少数の人に頼るのでなく

みなが貪念を抑えて

人助けの善念を発揮し

共に造福すること

そうすれば

平安になって災難が少なくなる

在も続いています。この度のマシユー災害が発生する二週間前に、ボランティアは今年の支援米六百トンの配付を終えたばかりでした。

配付の過程では困難を極めました。なぜなら普遍的に貧しいハイチに対して六百トンの白米は焼石に水でしかありません。慈済は弱者の中から最も弱者の人々の名簿を作成して配付し、住民には自分よりもさらに貧しい人たちを憐れむよう教えながら、配付を順調に終わっていました。

ハリケーンが襲ってくる前にハイチ当局は避難勧告を出していましたが、多

大西洋で十年来最も強力なハリケーン・マシユーが十月に発生し、カリブ海の島国と米国東南海岸の五州を襲い、広範囲にわたる甚大な被害をもたらしました。中南米に位置するカリブ海に浮かぶハイチ共和国では、千人以上が死亡し、百万人以上が被災した上、コレラの発生が心配されています。

ハイチは非常に貧しい国で、一九九八年にハリケーン・ジョージに襲われた時は、慈済は四コンテナ分の衣類を送りました。二〇一〇年正月には強烈な地震に見舞われ、二十〜三十万人が遭難した時は、緊急援助と災害復興支援を行い、現

くの人は自分の家を守ろうと避難しなかったため、犠牲者が増えたのです。被災後、国際援助組織が空中投下した物資を人々は奪い合い、お年寄りや病人は道路が修復して救済物資が届くまで待たなくてはなりませんでした。

米国慈済ボランティアが実地調査に行つて、この知らせを聞いた時は悲しい思いにさせられました。もともとのあばらやは、この強風と大雨にひとたまりもなく全壊し、絶壁のようにうず高く積まれたゴミの山は、疫病の発生源そのものです。

被災の拡大を防ぐために、米国の慈済

ボランテニアはただちに防寒用の毛布、浄水器とインスタントご飯を、被災地に運送しました。そして調査に基づいて「日雇い雇用」を実施して住民を環境整理に導き、衛生状態が悪化するのを防止するのに努めました。

現在ハイチではまだ数万人が家を失ったままで、世界の人々の愛を必要としています。人々が観世音菩薩の愛を発揮し、地藏菩薩の大願力を以て被災者を助けてこそ、住民は復興の気力を取り戻して平安な日々を送ることができるのです。

大いなる心で願を立て
よい因を積むなら
よい結果が得られる

異常気象によって災難は頻発し、地球が病に侵されています。災難が少なくなるには少数の人々に頼るだけでは足りず、大勢の人が団結し造福してこそ大きな力になります。人々が警戒心を高め、調和した生活を送って、貪念を抑え、かつ人助けの善念を培うと、地球は平穏になって健康を保つことができます。

奉仕と同時に敬虔な心を持つことです。人と人との間が温かく、そして和や

かな中にも愛があるのが吉祥の地です。現在アフリカの八カ国で慈済の種子が芽生えています。南アフリカ、レソト、ジンバブエ、モザンビーク、スワチラン、ボザナ、ナイビア、シエラレオネ。これらの国々は貧しく治安は悪いですが、多くの人が慈済に参加して、自分よりも貧しい人を援助しているのは容易なことではありません。

南アフリカのダーバンの黒人慈済ボランテニアは三カ国を越えてナミビアへ行きました。往復すると四千七百公里、途中では顔を洗うことさえできません。それでもこの黒人の菩薩たちは喜び

に満たされ、目的地に着くと不慣れた環境でも、住民がどんなに冷淡であっても気にせず、大樹の下でボランテニアとしての経験談を話し、慈済精神を説明していました。至る所が道場です。ついに地元の人々は耳を傾け、慈済の活動を理解してくれました。この魅力的な菩薩はどうやって鍛錬してきたのでしょうか？

今年の九月、三人のナミビアボランテニアが南アフリカまで研修に行きました。早朝に着いて朝食を済ませると、すぐに現地のボランテニアについて村人に関心を寄せ、貧民の訪問ケアや孤児への食事の提供、大愛農場の手伝い、そし

て早朝には法の薫りに浸って修行をしていました。彼らはここで、自力更生の方法と、貧と病の苦難の人に対しては親身になって助けてあげなければならぬことを体得したのです。

ナミビアのボランティアのデフィロスが南アフリカ慈済ボランティアのリーダーの潘明水に、「心に愛があっても、物がなくて人を助けられない時はどうすればいいのですか」と尋ねました。

潘明水は、「その人を温かく抱擁し、肩をかってあげるのが一番良い方法だよ」と答えました。南アフリカの現地ボランティア自身も一様に貧しい境遇です。そ

れでも国を超えてスワチランで支援活動を行い、四年半で三千人以上の現地ボランティアを集めて自分より貧しい同胞の世話をしています。

デフィロスは敬虔なキリスト教徒です。日曜日に礼拝をしようと思つて、教会はどこにあるのかと聞きました。同じキリスト教徒のジーターは、愛があるなら、どこであろうとも心霊の教会で、いつでもお祈りができると答えました。

この若者はなるほどと思い、身につけていた聖書を取り出して話し出しました。「良い樹に悪い実はない。悪い

木には良い実はない」と。彼はさらに慈済ボランティアが力を入れて注いだ大愛は、遠く離れたアフリカにまで届き、さらにナミビアで撒いた大愛のよい因はよい実に成熟したと言いました。国に帰った後、彼は本国でもきめ細かく大愛の種を撒くことでしよう。

この黒人の菩薩たちは、菩薩道の因はよい果実が実ることを体得し、我が身は苦しくとも苦難の所へ馳せ参じ、奉仕する決心をしています。配付の時、重たい米を肩に担いでぬかるみの山道も厭わず進みます。心の中には常に教会があり、謙虚に人に愛を啓発しています。彼

らがやり遂げているのに、平安な地にいる私たちはさらに大願を立てねばなりません。

布施持戒

見返りを求めず

忍辱精進

試練にもまれ励むこと

この世にはさまざまな目に見えない苦しみがあります。生老病死、天災や人禍だけでなく無明煩惱、そしてさらに心身に受ける苦しみがあります。菩薩道を歩む上では、他人を救済するだけでな

く、心霊の苦も取り除いてあげねばなりません。

何事も耐えねばならない娑婆の世界は、正に修行の道場です。菩薩法は、布施、持戒、忍辱、精進、禅定、智慧の「六度萬行」から離れることはできません。

見返りを求めない奉仕とは、布施、持戒のことです。苦難を濟度するために、いかなる難をも忍び、苦勞を恐れずに前進すること、これが忍辱であり、精進です。人からどれほど非難を受けようとも、禅定と智慧があれば万難を克服して前進することができます。

いつも災難に遭う度、ボランティアは

「我が家は無事だろうか」他人の災難は私には関係がない」とは思わず、すぐさま救助に駆けつけ、人々の苦しみが一刻も早く和らぐことを願っています。この見返りを求めない奉仕が菩薩心です。

菩薩としての精進と奉仕は、何ものにもとらわれない三輪体空でこの世を温かくしています。しかしこの菩薩としての信念は永久でしょうか？ 謙虚にして堅い志を保っているでしょうか？ 日常生活の中で困難にあつた時、心は不動でしょうか？

凡夫の分かったようで分らない狭

い心では、移り変わる環境のままに煩惱が起こると、愛は恨みになり、情が仇になります。これらが纏わりつくと、人々との間が疎遠になってしまいます。心に恨みや仇が積もると、この世はますます重く濁って行ってしまうです。

屈強な性質は苦難のもとです。広くこの世に目を向けると、環境難民、戦争難民、さらに多いのが心理難民で、起きた無明煩惱は心の関所を通り抜けられませんが、

菩薩の道を歩いている時、心もまた常に菩薩の道にいなればなりません。苦難の人に奉仕するだけでなく、周りにい

る人にも真心を以て注意を払うのです。衆生と善縁を結ぶと善因を造ることができます。

身体をもつて

慈悲喜捨に励み

人とは誠正信実につき合う

慈済の宗教観は「宗」が人生の主旨で、「教」は生活教育のことです。静思法脈と慈済宗門の主旨とは、内に対しては「誠正信実」に、外に対しては「慈悲喜捨」を行っています。

人との付き合いが「誠正信実」から離

れてはなりません。戒律規則を守って修行するべきで、人として何事に対しても誠実で偏らず、正しい信仰をもたなくてはなりません。また「戒、定、慧」、「聞、思、修」も欠かしてはなりません。五十三年前、私が印順導師に帰依した時、導師は「仏教のため、衆生のため」というお言葉を私に下さいました。人々が仏教を信じ仏法を以てこの世に益するよう願っておられました。そして私は導師に「信受奉行」を約束いたしました。

半世紀以来、私はいつもこの信念を堅く守り、的確な方向に向かって、因縁を

把握し、衆生のために拔苦予樂をして参りました。誠正信実だけでなく、すべてを慈済のためにのみやって参りました。

五十年来、慈済の人たちが昼夜分かたず、時を惜しんで愛の道を敷いてきたことに心から感謝しています。慈済が発祥した台湾では、慈善志業が地域の至る所に浸透しています。国外の慈済人も時を把握し、国境を越えてまで衆生を救済しています。慈済の志業のすべては人の命を救い、慧命を成長させ人心を浄化するものです。

「愛の道は広く聞かれるが、道に出会うことは難しい」といいます。ですから

悲喜捨」に励むことが慈済人の生命価値観であり、また慈済宗門の家風でもあります。皆さんの精進を願っています。

「志を奉じて甚大な道を守る」必要があります。時は一方通行に流れるだけであり、戻ってくることはありません。一分一秒も大事にし、いつも無明や煩惱をふり切っていると、善念は絶えず増してきます。

仏法は世直しの良薬です。仏陀の教育に「諸悪をなすなかれ、衆人は善を奉行せよ」とありますように、善が少しでも増すということは、悪がその分なくなることです。自分の修養だけでなく、人々を善の道に導き共に歩いて、善の風紀を形成するのです。

人とはお互いに「誠正信実」で、「慈



ダムの下流のおばあさん

◆ 新北市・邱金秀

この日新店区亀山里に到着した私たちは、桂山路に沿って歩いてきた。聞こえるのは真夏の蝉時雨ばかり、民家など一軒も見当たらなかった。一、二キロも歩いてようやく、環境保全菩薩の邱金秀おばあさんに会うことができた。おばあさんの家は北勢溪に面し、遥かに翡翠ダム下流の大堰堤を望むことができ、「我が家の前はダム、裏は山の斜面」という独特の景観が形成されていた。



目の前にいるおばあさんは静寂な山野と同じように物静かで、赤瓦の家の中に整然と設えられたシンプルな家具も、家の主人の性格とよく調和していた。ここには開発の歩みが及ばず、まるで時間が五十年前で止まっているかのようだ。翡翠ダムの水源はこうして汚染から守られているが、一方おばあさんの身体は若い頃の不健康さを失い、腰椎症を患っており、一日中コルセットを外すことができない。

辺鄙な山奥で育ったおばあさんは、幼い頃から天秤棒を担いで茶摘みをし、家計を助けていた。結婚後も家庭は貧しく、風邪をひいた幼い娘を医者に見せるお金がなく、死なせてしまったことは何より辛い思い出だ。それでも最も苦しかった時代、親切な近所の人々が米を分け与えてくれるなど救いの手を差し伸べてくれたことに、おばあさんは今でも感謝している。ある時おばあさんは、雑貨店で環境保全リサイクルで人助けや災害援助ができること耳にした。貧困の苦しみを身にしみて知っているおばあさんは、憐れみの心が啓発され、こうして環境保全活動を始めることになった。





雨水も再利用できる

自転車に乗れない金秀おばあさんが、徒歩で出かけて行って両手で回収できる量は多くない。そこで天秤棒の両端に回収品をぶら下げて運ぶ方法を思いついた。こうして「天秤棒おばあさん」と呼ばれるようになった彼女は、十年以上、天秤棒を背負って回収品を拾い集め、徒歩で四、五十分かかるような山道でも、リサイクルに出したい物があるという家庭があれば、苦勞をいとわず出かけて行った。おばあさんの人助けの一念は揺らぐことがなかった。

しかし近年著しく身体機能の衰えたおばあさんは、以前のように天秤棒を担いで回収品を引き取りに行くことができなくなり、「天秤棒おばあさん」も過去のものとなってしまった。それでもおばあさんは環境保護活動を諦めたわけではない。今でもリサイクルに出す物を持って来る人がたくさんおり、コルセットをつけた彼女は自分の手でそれらの分類を行い、袋に詰めて、リサイクル品回収の車が来るのを待つ。

どうしようもない身体の衰え

この日山では大雨が降っており、私たちがリサイクル品回収の車とともに着いた時、おばあさんはゴミ袋を雨具代わりにし、麦わら帽子をかぶって玄関にしやがんで回収品を洗っていた。八十歳になるおばあさんは読み書きはできないが、雨水は大地を潤し、ダムに注ぎ込み、家庭の生活用水となるのであり、神様の賜物であるという道理はよく分かっている。おばあさんは水道水を浪費したくないと、雨水を利用して回収品を洗うことにしているのだ。まさに水を儉約する昔の人の美德であり、また「清らかさは源にあり」の模範でもあるだろう。

おばあさんが環境保全のためのリサイクル活動を始めた時、家族は反対した。だ



おばあさんのインタビューを終えた後、翡翠ダム上流の景色に好奇心をそそられた私は、石碇の千島湖を見に行くことにした。高台に立って見下ろすと、山々が連なり、丘陵が起伏し、小山が湖面に遮られて小島のように交差する光景に思わず息を飲んだ。ここは重要な水源保護区であるのみならず、大台北地区の生活用水の主

誰もが仲間となってくれるように

痩せて小柄な金秀おばあさんは、何年も一人でたくさんのお回収品を処理してきた。分類という手間をかけても、それらの回収品を環境汚染を招くゴミにしてしまいたくなかったのだ。しかし去年、大量の回収品を処理する体力がなくなったことに気づいたおばあさんは、やりきれない思いではあったが、息子に「もう持って帰って来なくていいよ。もう分類は無理だから」と告げた。

な量であった。



が結局おばあさんの固い意志には勝てず、今では息子と嫁も協力してくれている。

かつてダム清掃の仕事をしていた息子は、ダムの水面にゴミが漂っているのをよく目にした。上流から流れて来るそれらのゴミは、大雨や台風の後では大量にダムに流れ込んだ。息子はダム管理機関の同意を得た上で、ダム清掃後の回収品を車で持ち帰り、おばあさんはそれらの回収品を分類した。毎回息子の持ち帰る回収品はトラック三、四台分にもなり、庭から溢れてしまうほど厩大



要な水源の一つでもある。

私たちは毎日、蛇口をひねって便利な水道水を楽しんでいるが、ダムとゴミ、リサイクルの關係に思いを致すことはない。四十年以上ダムの下流に暮らす金秀おばあさんは、水源の汚染や資源の浪費を見るに忍びず、自らの時間と体力を削ってダムのゴミの回収と分類を行ってきた。その責任感に私たちは敬服させられた。

しかしおばあさんの体力は年とともに衰え、動けなくなる日も来るだろう。一方ゴミのリサイクルの仕事に終わりはない。「おばあさんがいなくなった後、回収品をどうするか、考えたことはありますか」。私がこう尋ねると、おばあさんは、「息子に託します。彼らに引き継いで欲しいと思っています」と答えた。この日ちょうど手伝いに家に戻っていた息子に、おばあさんがもう一度自分の望みを伝えると、孝行者の息子はすぐに請けあった。そばで聞いていた私は、それが単なる口約束ではなく、心から心への伝達であることが分かった。水利事業は百年の大計で、おばあさん一家のみの責任ではない。誰もが環境保全の使命を担い、あなたも私もおばあさんの仲間となれるように努力しよう。

【法を聞く心得】

◎ 撰文・李秋月／訳・慈願

万事に理が通ると円満になる

ボランティアになってから、いろいろなことをして、さまざまな人に会いました。人生でもっと深く体得することができています。

病院の外科ICUで三日間ボランティアをしていた時、ある老夫婦の姿が私の目を引きました。二人は焦った様子で患者の家族に懇願していました。「お願いです。お子さんに会わせて下さい。私たちの不注意でぶつけたので、会って謝りたいのです」。しかし患者の家族は頑として聞き入れず、老夫婦を追い返していました。

老夫婦は涙をためてしょんぼりと帰って行きました。この老夫婦は早朝に

筍を収穫して、新鮮なうちに市場へ売りに急いでいたのです。二人は何かにぶつかったことが分かって車から降りて見ました。人にぶつかったのですが、その時はたいしたことではないと思って市場へ急いだのです。それで患者の家族は人の命をないがしろにしたと、とても怒っていました。

このやりとりを目の当たりにして、ボランティアとして、何とか懸け橋にならなければと思いました。そして老夫婦に、「家族の方は、今はあなたたちにお子さんを会わせたくない気持ちですが、あなた方が毎日来てお願いし続ければ、きっとその誠意に感動して会わせてくれるのではないのでしょうか」と話しかけて慰めました。そして、家族には「お子さんをぶつけていながらすぐに病院に連れて行かないのは本当にいけないことですね。でも今はこんなに後悔しているのだから、明日はお子さんに会わせてあげて、謝らさせてあげてはどうでしょうか」と言いました。

翌日病室では相変わらず、患者が荒い息づかいをしていましたが、いつもと違う雰囲気にも包まれていました。家族は、「昨日のおじいさんとおばあさんが見舞に来たのですよ」と言いました。おじいさんが、「家族の方がお見舞いにくるのを許して下さいました。私の不注意でこんな大けがをさせてしまつて、すみませんでした」としきりに頭を下げていた時、嬉しいことに家族がお子さんの名前を呼ぶと、手を動かしました。こうして和解は成り立ちました。

三日間のボランティアとしての役目が終わって病院を離れる時、「病人を見舞う仏陀」の絵の前で手を合わせて、患者の一日も早い回復と老夫婦の健康を祈りました。

早朝、證嚴法師が《法華經信解品》の講釈をされた時、「依事觀因縁、所生之事相、就理觀方法、真实性觀法、雖值仏慈悲、同体共実法、未入仏正慧、

妙覺法海中」という経文についてお話しました。すなわち、慈悲を示す私たちは一刻も細心に、世の中の事を觀察して善人として事にあたつてこそ、さらに深く道理を理解することができるということです。

上人はまた、仏典に出てくるお話をされました。ある長者が子供を連れて布施をし、人に対しては敬うことを教えて、早逝の運命だった子の運を変えました。人に対してよくしてあげると、人も私たちによくしてくれます。人と事に対して円満であるだけでなく、道理にも円満にならなければなりません。そして話す時、心の動き、動作のすべては法と符合していなければならないということです。

道理の通りに動くと、日々の人、事、物が円満になります。道理のすべてが円満なら、それが「覺円（円滑）」ということです。人々は仏と同等の仏性があつて、発心修行し、悪法を取り除いて、善法を追及すれば、いつの日

か慈悲と智慧の境地に到達することができるといいます。

このことについて私は考えました。老夫婦は一時の観察を誤ったがために、知らぬ間に起きた無明によって、もう少しで若者の命を落とすところでした。もしもその中で道理を観察していれば、道理にかなった行為によって、すべての事は円満に運び煩悩を免れたことでしょう。

ここで私は、事々は心静かに観察して理を深く考えなければならないと感じ入りました。ですが、何か事にあつた時、心は乱れずに天を恨まずにいられるでしょうか？ 私たちに「何事も因縁による」重要性と「理とは万法」の妙技を示され、私たちが永遠に心のよりどころとする方向を示された上人の開示に、深く感謝しました。

【人生の禍福は一念の間にある】

整理、編集部

仏陀が在世の頃に、ある長者が五、六歳の子供を連れて占い師に運命をみてもらいました。占い師は、この子は福德が具わっているが寿命が短いと言いました。

長者はバラモン修行者を訪ねて、この子の寿命が延びるように願いましたが、皆頭をふってそんな能力はないと言いました。傷心した長者は仏陀を訪ねました。

仏陀は世の中に寿命を延ばす方法はないが、一つだけ方法を教えよう、子供を連れて城門で行き来している人たちに礼を尽くして祝福しなさい、と教えられました。

長者は子供と城門の下で人を見ると、最高の礼を尽くして心から祝福をし

ました。城外には多くの貧しい人がいました。その人たちに真心をもって布施をし、布施をすればするほど心は幸福感に満ちていました。布施をするところが習慣になって、いつしか当初の寿命の延長をする願いを忘れてしまいました。しかし助けを受けた人たちは、親子の心からの助けに感謝した見返りとして親子の幸せを祈っていました。

ある日、鬼神がバラモンに化けてこの子の命を取りにきました。城門まで来ると父子のいろいろな慎ましい善事を聞いて、他の人と同じように「長寿と幸せ」を祈りました。鬼神は自分の口からこの言葉が出たのですから改めることはできません。ですからこの子はめでたく長寿を全うしたのです。

上人はこの話をされ、人生の禍福はその一念にあると言われました。心に無私の愛があると、常に人の幸せを思つて煩悩を忘れ、悪念は起りません。尊重の心を以て人を助けるとお互いが幸せになり、よい因はよい縁を得られます。

◎撰文・林美蓮／訳・慈願

法は清らかな水の如く塵埃を浄める

永遠に記憶に残る二〇一四年一月十三日は、私が初めて「早朝の鐘の音と共に法の薫りに浸る」修行に参加した日です。この日の上人はお体が優れませんでしたので五日後に出られ、お目にかかることができませんでした。上人がオンラインで話される説法を聴いて、この機会をしっかりと把握しなければならなかったと思いました。

「早起きもまた修行」と上人は晨語の中で述べられています。シッダルタ王子はあらゆる苦行をされた後、菩提樹の下に正座し瞑想されていた時、夜明けの明星を見て悟られました。「夜の明星を見る」と指しているのは、空がまだ明けきらない時の、「心の光り」と「星の光り」が接触して交わった刹那間に、忽然と悟られたことです。

かりに私たちがいつも法を聴いていると、逆境に遭った時、心の中にある法を以て泥沼から脱出することができます。法は私たちにとって「明星」と言えます。

上人は、私たちも仏と同じく清らかな本性を持っていますが、衆生は累生累世において絶えず煩惱の砂塵に覆われている上に、無明の業を造って五道四世の中を流転しているとおっしゃられました。それはまるで古跡が千年またはそれ以上長い間、地底の奥深く埋藏されて未だ発掘されていないかのようです。具わっている仏性を発掘するには、考古学者のように慎重に一層、また一層と砂を取り除かなければ仏性は現れませんと、上人はお教えになりました。

ある時、私が掃除をしていた時、塵がなかなかきれいに掃除できないので、箒を使ったらかえって塵が舞上って掃除を済ませた所まで塵だらけにな

りました。そんな時、雑巾で拭いたらきれいになります。

上人が「大きいミスは改めやすいが、小さいミスは容易に改められない」と言われたのは、無明の砂塵は法水で洗浄しなければならず、近眼の人が目の前の物がはつきり見えずに煩惱を生じることと同じことです。ただし、眼鏡をかければはつきり見えます。心のぼんやりや無明も仏法で矯正しなければなりません。

私は上人の説法を聴くのが好きです。上人は仏法を分かりやすく日常生活にたとえて話されます。《法華経薬草喻品》を学ぶ時、私たちはお経を携えて一緒に野山を歩き、雲を愛で、草木叢林を知ります。この喻を通して、私たちは水が大地を潤し、法は人心を潤していることを知ります。

上人の声の説法、居並ぶ法を聴く弟子たちの後ろ姿は、さながら無声に説法です。両者が織りなす感動的な子弟の情は、私の心に深く焼きつけられています。

■ 静思語

【功德無量とは】

仏教徒がよく口にする「功德無量」とは、為すべきことを文句を言わずに為し、限りなく為し、時を移さずに為して、その上見返りを求めないことを指す。これこそ正に無量の大幅報であり、いわゆる「功德無量」である。



慈濟大事記九、十月

訳・済運

09・24

◎慈濟基金会は福智仏教基金会が発起した「愛で海を包み込もう ビーチ清掃―万人総動員」活動に参加した。この日、各地の慈濟ボランティアは台湾全土の13カ所のビーチで、海洋クリーンアップ連盟の記録表を使って廃棄物を分類し、種類、数量別に記録した。回収したリサイクル

09・30	09・29	
台湾文創公益発展協会の主催、慈済大学の共催で「宗教NGOの永続性」をテーマとした人文座談会が開かれ、米カリフォルニア大学サンディエゴ校のリチャード・マドセン教授、慈済大学の何日生助教授、インドネシア・ヌルイマンモスクの責任者ワヒード氏、英オックスフォード大学	台風17号は台湾南部に大きな被害をもたらし、各地の慈済ボランティアが見舞い活動を開始した。高雄のボランティアは29日と30日に旗山、美濃、田寮月世界で「安心家庭訪問」を行い、緊急災害支援金と生活必需品を653世帯に配付した。嘉義、台南、宜蘭のボランティアは29日に被災地区で被災者を見舞い、慰問と祝福の贈り物を届けた。	をボランティアに指揮した。花蓮、台東、宜蘭、高雄などでも防災調整センターを立ち上げ、各地の被災状況を報告した。

09・26	09・25	
台風17号が台湾に上陸した。慈済基金会はこの日の午前中に防災調整指揮総本部を設置し、台風の動向と災害状況を把握し、支援物資の準備	アメリカ、台湾、フランスの慈済ボランティア7人が9月25日から10月1日まで、シエラレオネで慈済からの支援物資の使用状況を調査すると共に、ニュートンとコインドウでエボラ出血に感染した孤児や身体障害者に台湾人道支援白米を配付した。	ル可能な資源は11704キロに達した。 ◎『大愛が導く 静思語教育の手引き』の新書発表会、と静思ブックカフェ「心の講座」が9月24日に慈済人文志業センターで、26日に高雄静思堂で、10月30日に台中静思堂で行われる。同書は学校教育と家庭教育に適しており、計11冊から成る。

10・01	のリチャード・ゴンブリッジ教授とジョン・ホフトマイヤー教授らが参加して、宗教系N G Oの理想的なあり方と慈善事業について討論を行った。 ◎花蓮県秀林郷慕谷慕魚で1日午後、落石崩落事故が起きトンネルが塞がれ、約100人の観光客が足止めさせられた。掘削作業は深夜にまで及び、花蓮の慈済ボランティアは被災者にミネラルウォーターやパン、防寒のための毛布などを緊急に銅門派出所に届けた。 ◎10月1、2両日、慈済大学、慈済科技大学、慈済基金会が合同で主催する第4回慈済フォーラムが新店静思堂で開かれた。国際社会で宗教や哲学、非営利団体などに関する研究をしている専門家や法師が集まり、「仏教の普及性と慈済宗派の展開」について幅広い観点から討論を行い、仏教の現代社会に対する貢献とその価値について研究した。

10・06	◎慈済ミャンマー支部はマレーシア慈済人医会メンバーとミャンマー医療人員と共に、1・2両日、タイキ町とタンイン市で1302人に対して施療を行った。 ◎マレーシア・サンダカンの慈済ボランティアは「幸福学校計画」の一環として、長期にわたってパイタン村の僻地にある学校を支援している。この日、クアラルンプールの慈済人医会メンバーとボランティアが手分けして3つの小学校で施療と配付活動、人文教育を行った。 ◎花蓮慈済病院地域医学部門とリハビリ科が花蓮市でお年寄りのために「九九重陽健行及び楽齡健康講座」を催した。地域のお年寄りの関節と筋力を検査したほか、体感ゲーム感覚の「遠距離リハビリシステム」、「体力強化システム」を使って正しい筋骨の動かし方を教えた。 ◎台中慈済病院は母子親善優秀医療院に選ばれた。この日、「2016

10・16	10・15	
ハイチ慈済ボランティアのダニエルはポルトープリンズの現地ボランティアを引き連れてハリケーン・マシューで大きな被害が出たレスカイ市を訪れ、バプティスト教会で初日の今日、100世帯の被災者に炊き出しを行った。	タイのアユタヤ・セナ県で雨季の豪雨による水害が発生した。慈済ボランティアはこの日、ワウイオン市街地でワウイオンとバンクラタム町の1459世帯に米と卵、食用油、飲料水を配付した。	市を視察した。 ◎イタリア慈済ボランティアは8月に起きた中部地震の重被災地であるアルクアータデルトロントを視察すると共に、現金カード配付活動の準備について話し合いをした。

10・09	10・07	
◎4日、ハリケーン、マシューがカリビア海一帯に大きな被害をもたらし、約140万人が緊急支援を必要とする状態になった。アメリカ慈済ボランティアの邢敏ら3人は9日ハイチに到着し、10日から12日まで現地ボランティアと共に重度被災地であるレスカイ市とジェルミー	台風19号の気流の影響を受けた花蓮県、台東県に豪雨被害が出た。慈済基金会は7日、防災調整センターを立ち上げ、各地の被害状況を把握した。連日の降雨による土砂災害の発生で、台東県太麻里郷の18世帯が損壊した。ボランティアは11日、緊急災害支援金と生活必需品を配付した。	年優秀母子親善病院模範学習活動」が行われ、参加者と実践経験を分かち合った。

慈濟

2016 年 11 月 17 日 発行・239 号

中華郵政台北誌字第 909 號執照登記為雜誌交寄

Printed In Taiwan

発行人 釋證嚴
発行所 慈濟基金会
〒112 台湾台北市北投区立德路 2 号
編集 慈濟日本語翻訳チーム
杜張瑤珍・張涵
校閲 山田智美
電話 (886)02-2898-9000
FAX (886)02-2898-9920
E-mail: 019874@tzuchi.org.tw

慈濟基金会日本支部
〒169-0072 東京都新宿区大久保 1-2-16
電話 (03)3203-5651 ~ 5653
FAX (03)3203-5674
E-mail: jptzuchi@yahoo.com.tw
tzuchi@tzuchi.jp

證嚴法師のお言葉、委員や会員の体験談、慈濟に関するニュース等を日本の方々にお知らせする目的でこの小冊子を編集しました。日本文への翻訳は素人である私たちがしましたので、不備な点や、つたないところがあると思います。ご感想やご教示がいただければ幸いに存じます。(日文組編集同人)

貴方は社会大衆が貴方への個人崇拜を
するようにしてしまったのですか？

全てが無常である、と仏が言われてい
ます。私は全力を尽くしてするべき事
をしているだけであり、そのような事
を考えたことはありません。



訳・済運 絵・蔡志忠／彩色・慮扶
《清らかな智慧》より